
CHANGE

なんじ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C H A N G E

【Nコード】

N 8 2 5 1 B

【作者名】

なんじ

【あらすじ】

高木刑事と佐藤刑事を襲った信じられない出来事。窮地に陥った二人を救うためにと、快斗は紅子からある物を盗んで欲しいと頼まれる。

「触らないで！」

少女の叫び。

しかし、それは二人の刑事の手を止めるには一瞬遅すぎた。

自分達がぶつかったために、少女の手から落ちた鞆。

そこからころがり出た、黒い水晶球を拾おうと

佐藤と同時に手を触れたその瞬間、

高木は、周りの風景が突然反転するような奇妙な感覚に囚われた。

それはほんの刹那。

僅かの違和感を残して、すぐにもとの景色にもどる。

自分の手の下にあつたはずの、水晶球が消えている。

「触らないで」と叫んだ少女は、茫然とした瞳で、こちらを見下ろしている。

「高木！何してる！早く！」

千葉の声に高木は立ち上がる。

え？どうして、自分が目の前に立ってるんだ？

目の前の自分も、目を見開いてこちらを見ている。

「た、高木君？」

この声は自分の姿から、自分の声で発せられる。

「佐藤・・・さん」

そして、自分が出したはずの声は、自分の声ではなかった。

「う・・・そ・・・」

二人は同時につぶやいた。

「黒羽君！すぐ来てちょうだい！盗んで欲しい物があるのよ！」

「おい、紅子・・・。俺は、怪盗キッドじゃないって何回言ったら・・・」

「がたがた言っていないで！時間がないのよ！！執事を迎えに行かせるわ！」

とにかくすぐ来て！」

快斗の返事も待たずに切られた電話の余韻も消えぬ間に、階下から母親の声。

「快斗、小泉さんのお使いだつて方がこられたわよ」

「待て！尾道！」

千葉の声に高木は、現状に引き戻される。

自分の状況はとにかく置いて、逃走中の犯人を追跡しようと、

高木は駆け出した、つもりだった。

いきなりスカートに足をとられて転ぶ。

無様に歩道に這いつくばる自分を見下ろす自分自身の顔。

「何してるの！たかつ・・・いや・・・さと？」

「佐藤さん、早く追って！」

高木は自分自身の姿に必死で叫ぶ。

困惑の色を露にした瞳のまま、佐藤は、尾道を追いかける。

追いかねなければ、自分も。

“佐藤さん！いつもこんな格好でよく、ビルから雨どいに飛び移ったり、

歩道橋から飛び降りたり、できますね！」

思い通りに開かない足に苦戦しながら、高木は走り出した。

「お前の魔術の研究中に作った、

心を入れ替える水晶球に、刑事二人がうかつにも触っちゃった、とそれを元に戻すために、二人の髪の毛が欲しいから盗んでくれたあ」。

おい、そんな話信じて言うのか？」

「信じる信じないはあなたの勝手だけど、とにかく、髪の毛が今すぐ欲しいの。」

後1時間もすれば、体に心が固定してしまつて、二人を祭壇に乗せてしかるべき儀式をしなくちゃ、戻せなくなる。そうなつたら、大変よ。

今なら髪の毛を使った簡単な魔術で元に戻せるのよ」

話の内容はとにかくとして、紅子の真剣さは疑うべきもなかった。

「その刑事達はどこにいるんだ」

結局、尾道を見失つてしまった。

体を二つに折つて息を切らす自分に缶コーヒーが差し出される。

「どうぞ、佐藤さん」

「あ。ありがと。千葉・・・君」

顔をあげて、コーヒーを受け取るうとした自分の目の前から、缶が取り上げられる。

「ダメ！トイレに行きたくなつたらどうするの！」

すさまじい形相の自分自身の顔が目の前にある。

“さ、佐藤さ〜ん！気持ちわかりますが〜”

「お、おい高木？お前どうしたんだ？」

あまりにいつもと違う、同僚の態度に、千葉は、啞然とした様に言つた。

高木は慌てて言つた。

「あの、ね。さっき高木君、追跡中に、私と一緒に、女の子にぶつかつて、

で、あの、ちょっと頭ぶつけたみたいで、だから、ちょっと二人で話させて！」

千葉から離れて、高木は、佐藤をビルの陰に連れ込んだ。

「佐藤さん、ですよね」

「高木君よね？私たち、夢でも見てるのかしら？」

「僕たち、体が入れ替わつちゃたんですね？一体なんで？」

「そうね、尾道のアパートの踏み込んだ時、

仲間と一緒に麻薬の吸引中だったでしょ？

タバコだって、吸っている時の煙は回りの人の健康に害を及ぼすくらいだから、

連中のやっている薬の煙を吸ってしまった私たち、幻覚を見てるのかも？」

「とにかく、どうしましょう？」

「どうしましょう、と言ったって、尾道の確保が先よ。

とりあえず、あなたは、私のふり。私はあなたのふりをして尾道を確保しましょう。

これが、幻覚なら、そのうち醒めるわ」

「醒めなければ」

「その時は、また対策を考えましょう。

それにしても暑いわね」

「ネクタイ緩めて、シャツのボタン外すと良いですよ」

「えっと。わ、意外と難しい。どうするの？」

高木は佐藤の、というか「自分」のネクタイを緩め、シャツのボタンを外してやる。

と、地の底から響くような声がした。

「高木く〜ん。そこで一体何をしているんですか〜」

魔王そのもののような顔をして、白鳥警部がやってきた。

「あ、あの白鳥・・・君。さと、じゃなくて高木君が暑いって言うから」

高木は慌てて、白鳥の方に向き直った。

「ちよっと、暑いからネクタイを緩めてもらっただけ。それがどうかしたの？」

（の、じゃないですよっ、佐藤さん）

小声で、言う高木の言葉に、

今、自分は男言葉を使うべきだ、と気づいたのか佐藤は続けた。
「別にかまわないだろ」

“わー、なお悪いー！佐藤さん、白鳥さんは僕にとっては、先輩なんですよ”

きらりと、白鳥の目が光った。

「なるほどね、そういう態度で来ましたか。

佐藤さん、外して下さいませんか？

これから、少しばかり男同士の話をしますから。

何、時間は取りませんよ」

高木はおそろおそろ佐藤の方を見た。

“ひー、佐藤さん、やる気だ”

ここで、立ち回りをさせるわけには行かない。

高木は、白鳥の腕にしがみついた。

「やめて下さい、白鳥さん！」

白鳥の動きが止まった。

佐藤が自分を見つめている。

それも、こちらが焼き殺されそうなほどの、凝視である。

訳がわからずにいると、白鳥が、動揺した声で言った。

「あの、佐藤さん。手、手を離して下さい」

見ると白鳥は、真っ赤な顔をして、高木の、というか、佐藤の胸元を見ている。

高木が、しがみついた結果、奇しくも、白鳥の手は、

佐藤の体の胸のふくらみをわしづかみにする格好になっていた。

「すみません！」

高木は慌てて手を離れた。

謝った相手は、佐藤のつもりだったが白鳥は誤解した。

「高木君。佐藤さんに免じて、生意気な口の聞き方は、勘弁してあげますよ。

さ、もう一度、尾道を囲みます。

配置を説明しますから、南の駐車場に来て下さい」

「ターゲットはこの二人」

車の中で、紅子は携帯の画面を見せた。

「今から行く米花第三ビルの南駐車場にいるわ」

「なるほど。しかし、よく、刑事の顔写真なんか急に手に入ったな」

「念写よ」

「はあ？まあいいけど。」

そんなことできるんなら、念力かなんかで、髪を抜けばいいのに」

「精神的な物は比較的簡単に操れても、物質的なものをコントロールするには、

それなりの儀式が必要になって時間がかかるのよ！」

「はあ・・・」

「私たちが知らないと思っているらしく

やはり、尾道は、あのマンションに逃げ込みました。

アパートで押さえられないかもしれないと念のため張っておいてよかったです」

嫌味を込めた目で白鳥は、佐藤を見る。

負けずに佐藤もにらみ返す。

周りの者は、驚いたように二人のにらみ合いを見つめる。

「白鳥君、早く続けて」

高木は何とかしようと、言葉をかけた。

「分かりました、佐藤さんの仰せとあらば。

では、配置ですが・・・」

佐藤が、ネクタイをもつと緩めようとしてか、
駐車してある車の窓ガラスに自分の姿を映す。

そして、まじまじと、自分の姿を見つめる。

と、急に顔を赤らめて、シャツのボタンをはめ、ネクタイをきつちり締めなおし、

あまつさえ、折り曲げて上げていたシャツの袖まで、下ろしてしま
った。

高木はこっそり、話し掛けた。

（暑いでしょう、佐藤さん）

（いいのよ、これで）

（でも）

「余計なお世話！」

赤い顔をしたまま、佐藤が叫んだ。

皆が、ギョツとした様に、佐藤を見た。

「おい、高木どうしたんだ、本当に」

千葉がそう言った途端、突然、鋭い羽音が響いた。

「痛っ！」

佐藤が頭を押さえる。白い鳩が佐藤を襲っていた。

高木は慌てて鳩を追ひ払おうとしたが、鋭い痛みを感じて頭を押さえる。

「なんて鳩だ！佐藤さんを襲うなんて！」

刑事の一人が石を投げた。

白い鳩達はあつという間に空高く舞い上がった。

「で、これが髪の毛」

「助かったわ。黒羽君。これで大事にならずに済むわ。

じゃあ、10分ほど車の外に出ててくれない？

魔術が終わったら、すぐお宅にお送りするわ」

「いや、せっかく米花町まで出てきたんだから、本屋にでも寄って
電車で帰るさ」

快斗はぶらぶらと通りを歩き出した。

高木は待った。

マンションからのどの逃走ルートにも、刑事が張り込んでいる。

白鳥、佐藤はマンションに踏み込む手はずだ。

本当は佐藤と一緒にいるつもりだったのだが、白鳥に却下されてしまった。

『先ほどの駐車場の振る舞いを見ると、今日は、高木君は、

佐藤さんといないほうがよいみたいですよ』

“ 佐藤さん、お願いですから、白鳥さんとケンカしないで下さいよ ”

携帯が鳴る。

“ 高木君？尾道の奴、窓から飛び降りてそっちに向かったわ！ ”

自分の声が携帯から聞こえるのは奇妙だ。それも女言葉。

高木は身構える。

と、突然、曲がり角から、尾道が現れる。

千葉の姿に気づいて、こちらに逃走方向を変えたのだ。

さあ、逃がさないぞ！

身構える、高木に向かってまっすぐ尾道が走る。

「どけえ！ガキイ！」

“ え？ ”

高木の横にごく細い横丁があり、そこから、突然、少年が出てきた。

驚いた表情の少年の頭上に振りかざされるサバイバルナイフ。

高木は一瞬の抵抗も気にせず、思いっきり足を上げた。

「すげえ廻しげり」

少年が感歎の面持ちでつぶやく。

「怪我はないかい？」

そう言いながら高木は、地面に倒れた尾道の手到手錠をはめた。

と、突然回りの景色が反転する奇妙な感覚。

「高木君、ちゃんと走りなさい」

よろめく自分に、冷たく言う、白鳥警部。

“ 確かに今自分の事を『高木君』と呼んだ。

目の前に見えるのは、尾道に手錠をかけた、佐藤さんだ。

やった、元に戻ったんだ！ ”

喜びのあまり高木は佐藤に駆け寄った。

「やりましたね、佐藤さん！」

いきなり佐藤は、高木のネクタイを引っつかむ。

「なんてことしてくれたのよ！高木君！」

「は？」

「スカートよ！ひどいじゃないの！高かったのよ！これ」

見ると佐藤のタイトスカートには、太ももが露わになる、大きなスリットができていた。

そう言えば、さっきの廻しげりの時・・・。

「あの、佐藤さん、いくらなんでも、それは高木のせいじゃないんじゃないあ・・・」

「千葉君には関係ないことよ！」

そういうと、佐藤は、振り向きもせず、尾道を引っ立てて、白鳥たちとパトカーに向かった。

がつくりと肩を落とす高木に千葉が話し掛けた。

「まあ、高木。お前だって今日は、佐藤さんにやつ当たりしまくってたし、な」

力なく笑うしかない高木であった。

二人の刑事を残して黒羽快斗はその場を静かに立ち去った。

“なあ、紅子、結構大事になったみたいだぜ”

空には、主人を見守って白い鳩たちが、舞っていた。

（終り）

（後書き）

入れ替わりネタで、困るのは「どうして入れ替わってしまったのか」か、その理由を考える事。

というわけで、紅子様に降臨していただきました（^^）

これなら、自然に入れ替わっていると思っっているんですがどうでしょう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8251b/>

CHANGE

2010年10月8日22時37分発行